HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	内村鑑三と女性 ： 外国人女性研究者の視点
Author(s)	ラフェイ, ミシェル
Citation	基督教學, 47, 58-64
Issue Date	2012-07-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/50534
Type	journal article
File Information	SC47_004.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

内村鑑三と女性
―外国人女性研究者の視点―

ミシェル・ラフェイ

はじめに

内村鑑三研究を進めていく中で、内村を研究している外国人には、筆者を含めて女性が多いということに気づいた。そこで「内村鑑三研究を始めたきっかけに共通点があるのか」という素朴な疑問が浮かんだ。これが本報告の出発点である。しかしその疑問は、さらに深い問いに通じるものでもある。なぜ女性研究者がいかにも男性的な内村に興味を持つのだろうか。筆者はこの調査を進めるにあたって、多少偏見を含むかもしれないが、内村の女性観は現代女性として理解しがたいという印象を持っていた。そして、その内村を女性が研究する背景には、おそらく何らかの共通点があるのではないかと考えていた。そこで、外国人女性研究者が内村研究を始めたきっかけや研究関心を調査することによって、内村研究に新たな発見がもたらされるのではないかと考えたのである。なお本調査では、研究者自身によって主観的に語られた言葉を重視したいと考えたため、質問票による調査という形をとった。

歴史背景

歴史的人物を研究するには、時代の影響を絶えず念頭におく必要がある。歴史的人物の態度と行為を現代の価値観で判断することは、誤解を招く可能性がある。逆に、「当時の考え方だった」という理由で、安易に歴史的個人に責任を帰さない結論に至るのも誤解を招く。同時に、研究者は自分が生きている時代の影響も常に考えるべきであろう。現代の研究者は多かれ少なかれ自己言及性に影響されていると言える。研究者の個人的要素が研究に影響するということは、研究の前提なのである。この点は、今回の調査にも密接な関係があると思われる。すなわちメタ的な視点から見れば、筆者が外国人であり、かつ女性であることから、本調査の設定には最初から二つ

の目的が含まれているといえる。一つはあるグループ（外国人女性研究者）の共通点と意見を調査し結果を明らかにするという目的であり、もう一つは、研究者自身が今までの研究を見つめ直し、これからの研究可能性を開くという目的である。それがさらに自分自身の再発見につながるという期待もここには含まれている。

内村鑑三の女性観

内村の女性観はいうまでもなく、時代に彩られたものである。しかし、ヘーレン・ボールハチェットは、いままでの明治期のキリスト教に関する研究は、キリスト教の理想が明治期のキリスト教徒に与えた影響と女性との関係をほぼ無視してきたと指摘する(1)。ボールハチェットは、〃. . . attitudes to female chastity differed according to status and occupation〃(2)と述べ、さらに、女性教育に関して次のように述べる。

> Female members of the samurai class . . . were educated, but it was an education specifically for women. Their lives centered on the home and subservience to their fathers, their husbands, and their mothers-in-law.(3)

ボールハチェットが指摘したポイントは、内村が尊敬する二人の女性のあり方と生き方について記した言葉に明瞭に現れている。

内村は、娘に「ルツ」という名前をつけるほど旧約聖書のルツを尊敬していたが、『貞操美談路徳記』には、まさに内村の期待する女性像が描かれている。

> 聖書の理想的婦人は従順の婦人なり、即ち権利を争はざる婦人なり、而して余輩の見る所を以てすれば東洋の理想的婦人は反て聖書の理想と相符合するものにして、今日欧米に流行し稍や已に我国に輸入せられし西洋婦人の理想は明瞭なる聖書の教訓と矛盾する所多きが如し。(4)

もう一人は、アメリカのマサチューセッツ州にマウント・ホリオーク女子校を創設したメリー・ライオン（一七九七

－一八四九年）である。内村は彼女について「私は其女の生涯を度々考へます時には、実に日本の武士の様な生涯であります。義侠心に充ち満ちて居った女で」あると語っている。[5] しかし内村は、男女教育の平等に努める「武士」のような生涯を送ったメリー・ライオンを賞賛しながらも、実際に武士であった日本人の女性は従順であるべきで、アメリカ的な女性の理想を受容するべきではないと主張する。内村は女性教育に反対した訳ではないが、日本における侍の女性教育は、理想とする上述の聖書の女性像に近いものであるがゆえに望ましいと考えていたのではないか。さらにここには、ボールハチェットが挙げたもう一つのポイント、つまり女性の貞操が身分と職業によって異なるものとして考えられていたという点も指摘できる。内村はアメリカの女性像を輸入するべきではないと述べるが、メリー・ライオンがアメリカ女性であり、その社会のなかでそれなりの身分と職業を持っていたからこそ、尊敬の対象になりえたのではないかと思われる。したがって、内村はある程度は女性の身分と職業を考慮していたと言えるのかもしれない。しかしながら他方では、日本の歴史的コンテクストを考えれば、同年代の新島襄の女性観と夫人の八重に対する姿勢は、内村の姿勢とはかなり異なるという印象が残る。時代の影響はどこまで考慮するべきか。内村個人の責任はどこから始まるのか。難しい問題である。

以上、内村の理想とする女性像を見てきたが、これをふまえて以下では、現代の女性研究者の見解を見ていくことにしたい。

調査方法

調査はきわめて簡単な方法で行なった。日本語と英語で七項目の質問票を作成し、五人の外国人女性研究者にメールで送付した。五人のうち四人から回答があり、二人は日本語で回答し、二人は英語で回答した。調査の項目は以下のとおりである。

一、内村鑑三研究をはじめた理由は何でしょうか。

二、内村鑑三に関する論文などで直接ジェンダーの問題を取り上げたことがありますか。あれば、その論点を簡単に説明していただきたいと思います。

三、内村鑑三に関する論文などで間接的にジェンダーに触れたことがありますか。あれば、その文脈を説明していただきたいと思います。

四、女性（や男性）というものに対する内村の姿勢を単に時代の影響としてしりぞけることができるか、他の要素があると思うか、ご意見をお聞きしたいと思います。

五、内村と彼のキリスト教のあり方に関する分析に、彼のジェンダーに対する姿勢を含める必要があると思いますか、それともその必要はないと思いますか。

六、「女性」内村研究者だということが研究に影響を与えたと感じていたことがありますか。

七、他に何かコメントがあれば、ぜひ教えてください。

結果と考察

結果を簡潔に言うと、当初予想したような「女性研究者としての共通点」は見つからなかった。しかしいくつか興味深い回答があるので、ここではそれらを結果として報告したい。

内村鑑三研究を始めた理由は、考えてみれば不思議はないが、自分の国や欧米の国々と日本におけるキリスト教との比較が中心となっている。具体的には、西洋以外の国におけるキリスト教的福音の解釈の検討（コズィラ）[6]、西洋以外の国での回心体験の検討（ゾンターク）[7]、「絶対非戦者」である内村のキリスト教信仰および思想の検討（李）[8]がきっかけとして挙げられている。三人は広い文化的関心に基づいて内村を考えていたと言える。コズィラは、ポーランド人であることは影響があったとし、内村と同じくキリスト教徒でありつつ愛国者かつ平和主義者であったアンジェイ・トヴィアンスキ（一七九九－一八七八年）との比較研究に至ったと説明する。逆に、多少狭い領域の社会におけるジェンダーを直接取り上げた研究者はおらず、李は内村の女性観について検討することを考えていたというものの、間接的にとりあげた研究者は筆者だけであった。

このテーマにおいて重要と思われる時代の影響については、意見が分かれた。コズィラは、

In my opinion *it is a product of his era* but he highly

idealized traditional Japanese womenhood. He has chosen the name Ruth for his beloved daughter because Ruth in Old Testament was loyal to her mother-in-law.[9]

コズィラの意見は、聖書の理想と武士の理想が近いものであるという議論に通じる。つまり、聖書における忠実観と明治期の忠実観が似ていると考えられているのである。李は時代の影響があることを認めるが、「それとは別に、彼のキリスト教信仰や思想と関連づけて検討してみる必要がある」とも述べる。筆者も同様に、時代の影響はあるが、それだけでは内村の態度全般を説明できないので、彼の態度の根拠を探らなければならないと考えていた。ゾンタークは時代と必ずしも関係しているものではないと見なしており、内村の思想を三つの分析方法によって検討することを提案する。

Following Lacan's definition of discourse types, Uchimura could be seen as a person who combined the "master's discourse" with the "discourse of the university" (knowledge for knowledge's sake), which is a very likely thing to do, when you are working in the field of education. (His lamentations and excessive social criticism=prophecy would fit the pattern of "the discourse of the hysteric".... which might be interesting with regard to gender issues, since feminist discourse is often called to be hysterical.) From the perspective of an psychoanalyst these types are existing throughout history. Adding from the perspective of deprivation theory, we could say, as long as there are people in need of this kind of interaction patterns, they will continue. The question of historical context would be the question of how much society was in need of his style interaction and teaching.

多様な面から研究する可能性があるということは、時代の影響といった問題の重要性を示すのではないかと思われる。

ところでゾンタークは、コメントとして"Suzuki Norihisa explained the fact that so many foreign women are

interested in Uchimura by his 'macho intellectual style' which supposedly attracts women." と記していた。このコメントでは、当時の女性を指すのか、現代女性をも含んでいるのかは分からないが、少なくともこの調査の結果を見ると、現代の女性研究者は、"macho intellectual style" に惹かれて内村研究をはじめたわけではない。このコメントが面白かったので、鈴木範久本人に尋ねてみたところ、内村の女性観は古いが、「『乙女心』が分かる人物だった」という返事だった。

結論

この調査を行なったことで、二つの成果が得られたと考えられる。「あるグループ（外国人女性研究者）の共通点とその意見の調査」と「研究の再考と研究可能性の創出」という目的については、上で見てきたように、かなりの成果があったと言える。さらに回答全体をみていくと、ある共通項が浮かんでくる。すなわち、回答した全員が研究者として、ジェンダーに影響されずに、きわめて客観的な姿勢を保ちながら研究しているということである。そして結局のところ、四人のうちで内村の女性観に強い関心を持っていたのは、他ならぬ筆者であった、という実に象徴的な結論に至ったのである。

註

（1）Ballhatchet, Helen, "Christianity and Gender Relationships in Japan: Case Studies of Marriage and Divorce in Early Meiji Protestant Circles," *Japanese Journal of Religious Studies* 34/1, Nanzan Institute for Religion and Culture, 2007, p. 179. " . . . writers on Christianity in Meiji Japan have paid little attention to women and the influence of Christian ideals on the actual behavior of Meiji Christians."

（2）ibid., p. 178.

（3）ibid.

（4）内村鑑三『貞操美談路徳記』『内村鑑三全集』岩波書店、一九八〇年、第二巻、二六三頁。

（5）同『後世への最大異物』『内村鑑三全集』岩波書店、一九八一年、第四巻、二八八頁。

（6）コズィラ・アグネシカ、ワルシャワ大学、教授。
（7）ゾンターク・ミラ、立教大学、准教授。
（8）李慶愛、折尾愛真短期大学、准教授。
（9）イタリックは筆者。